

李通玄における十二縁生の理解

小 島 岱 山

序

十二縁起説を李通玄独自の法界縁起説に基づいて、十種の立場より理解し直した論書が『解迷顯智成悲十明論』^①である。この『十明論』は李通玄の著作の中では最後に著作された論書^②であるので、その意味では李通玄の最も淳熟した思想が、この『十明論』には述べられていると言えよう。

『十明論』には李通玄の他の著作と同様に種々種々な興味あふれるユニークな論が展開されているが、本拙論では、その中からはじめに、李通玄の言う無明とは何かを検討し、あわせて無明を克服するための具体的な方策とは如何なるものであるのかを論究したい。

次に、十二有支全体を何故に大苦海なりと一切衆生は受け取ることになるのかということを究明し、あわせて十二有支全体を大功徳海なりと一切衆生に自覚せしめる為の具体的な方策とは如何なる内容のものであるのかを探究してみたいと

思う。

一 李通玄における無明の思想

『十明論』十頁に、「真智慧之体是一切衆生之本源也。為真智慧無体性、不能自知無性故、為無性之性不能自知無性故、名曰無明。如華嚴經第六地、不了第一義故号曰無明。」とある。真智慧の体とは一切衆生の本源のことであり、真智慧の体も一切衆生の本源も共に無性なる存在であるということとである。

ところで、真智慧はその体が無性であるが為に、真智慧は自らが無性であると自覚することができず、さらに無性そのものも、まさしく無性であるが為に、無性は自らが無性である^③と自覚することはできないのである。

誠にユニークな無明の定義であり、『十地經論』にも、智儼にも法蔵にも、このような独創的な無明の定義は一切全く存在しない。いや智儼、法蔵はおろか、『起信論』も含め、

インド仏教、さらには中国仏教全般を通じて無明そのものについてこの様な定義は一切全く見当たらない。李通玄に到って何故に、このような透徹した論理性に貫ぬかれた、独創的な無明の理解が出現することになったのか、さらにはまた、李通玄は「無明は根本智なり」とも盛んに主張するが、無明に対する李通玄のこのような独特の感覚は何に由来するものなのか、李通玄思想研究に於いて是非とも究明せねばならぬ最重要なる問題のひとつであると言えよう。

「十地品」の第六現前地からの引用文である、「不了第一義故号曰無明。」という文についても李通玄は独特な解釈を施している。『十明論』二四頁から二五頁にかけて、「以第一義中、無本無末無始無終無成無壞無三世古今、亦不可作本有及修生成就世間斷常諸見及諸諍論。」とあり、さらに『十明論』の三一頁には、「第一義中都無此也。」とある様に李通玄は第一義諦を無性なることと受け取っていることがわかる。したがって前述した第六現前地からの引用文の意味は李通玄にあっては、「無性なることを了せざるが故に号して無明と曰う」という意味であることが知られる。この引用文の第一義（第一義諦）という言葉は無性なることと理解することもまた李通玄の独自の解釈であって、『十地経論』をはじめ智儼、法藏にも一切見当たらない。李通玄以外はすべて第一義を真諦という意味で使用しているにすぎない。以上より、李通

玄の思想の根底には、とりわけ無明の思想の根底には、無性に対する徹底した自覚があったということがわかる。

ところで、一切衆生は真智慧同様、その本源は無性であるので、一切衆生の本源である真智慧の体の無性なることを理解することはできないのである。したがって結局、一切衆生は、真智慧そのものも、さらには真智慧の体の無性なることも、自ら知ることとはできないのである。無明に付随した範囲で真智慧と一切衆生との関係を言えば、今、述べた通りである。

では一体、一切衆生はどうすれば真智慧の存在を体解し、また真智慧の無性なることを自覚することができるのかと言え、『十明論』十一頁に、「既先賢得道利樂世間、明知真智要得了縁、方能現也。」とあるように、得道者としての先賢達が世間を利樂している姿と事実とを實際に目で確認する縁にめぐりあうことができれば、真智慧の存在を体解することができるという。

また、真智慧の体の無性なることはどうして自覚できるのかと言え、『十明論』の十一頁に、「若言真智本来自然常不變易者、即有所依。即有所住処。即堅然形質、十方虛空不可相容納也。即同外道及二乘并淨土菩薩皆有所依。故衆生自衆生、聖自聖不須教化也。」とあるように、真智慧が本来無性でないとするならば、真智慧はある一定の形質を持った固定的

な存在ということになり、固定的な一定の依り所があることになる。そうなると、それぞれがそれぞれの依り所に執着して、例えば外道は外道のままで、二乗は二乗のままで、浄土の菩薩は浄土の菩薩のままで終ってしまふことになり、結局のところ教化するということが存在しなくなるということになる。しかしながら、現に先賢達による教化が行なわれている。だから真智慧は無性であるということが自覚できると言うのである。これもまたユニークな論である。さらに教化ということが存在し得るのは真智慧の体が本来無性であるからであり、また真智慧の体の無性なることを自覚させることが教化ということの目的であるということでもある。

以上より、得道者としての諸先賢の教化の姿は真智慧の存在することを一切衆生に知らしめ、さらにはその無性なることを自覚せしめる働きをしているのだということが理解できる。さらに、以上のことを端的に言えば、いかなる理論をもつてしても、無明を克服すること、すなわち無明は根本智であるということを体解することは不可能であるということである。戒定慧の三学を遵守し、とりわけ観法を実践する得道者の生き方こそが、無明の衆生一切を救う唯一の方法であるということである。

二 十二有支全体に対する理解

『十明論』の冒頭ではっきりと述べているように十二有支全体については、李通玄は一切衆生が迷い続ける大苦海であると同時に、諸仏諸菩薩諸聖賢が常に逍遙し、活躍している大功徳海でもあると理解している。大功徳海であるはずの十二有支が、どうして衆生には大苦海になってしまうのかということについては、李通玄は『十明論』の十三頁に於いて、「以迷真智故、便有業生。十二有支因此而起。」と言い、さらに『十明論』の十七頁に於いて、「是故十二有支迷真智慧生。」と述べているように、一切衆生が真智慧に迷うからであるとしている。

真智慧に迷うとは、真智慧の存在を体解できないということであり、さらには真智慧の無性なることを自覚できないということでもあり、当然のことながら無明の理解と十二有支全体についての理解とは全く同じであるということがわかる。十二有支が大苦海になってしまう詳細なる理由は、無明のところで述べたことと全く同じ理由に依るのである。

そこで、ここでは次に十二支全体をどうすれば大功徳海なりと体解することができるようになるのかを検討してみよう。基本的には無明を克服すること、すなわち無明は根本智であるという自覚することの場合と同じであるが、背景となる理由のちがいや、論点の立場のちがいによって様々に論ぜられているので、資料に則して論究してみよう。

『十明論』の三頁に、「若以戒定慧觀照方便力、照自身心境、体相皆自性空、無内外有。即衆生心全仏智海。」とある。眞智慧の無性なる在り方を李通玄は空智慧（空慧）と呼んでいる。これは十住の初心で体解される。戒定慧の三学を遵守し、しかもそれによって得られた無量方便三昧力で自らの身心を静かに顧れば、自己自身は本来一切空なる存在であると自覚されるという。仏智海は本来無性なる在り方をしているのであり、そうであればこそ仏智海、すなわち眞智海と呼ばれるのである。元来、空ということ、無性ということが共通であるから衆生心は仏智海であると言われるのである。ちなみに無明は根本智なりということも、無性という点で共通しているからそう呼ばれるのである。

また、『十明論』の四頁から五頁にかけて、「但自淨一心。心無即境滅、識散即智明。智自同空、諸緣何立。以空智慧光明普見法門入十住初心。此如善財童子登妙峯山頂。以明相尽法門故。」とある。一心の淨め方の具体的方法は述べられていないが、「此れは善財童子が妙峯山頂に登るが如し。相の尽くるの法門を明すを以ての故に。」とあるので、妙峯山頂で徳雲比丘が修していた無相觀を念頭に置いているものと思われる。得られた結果は、光明が一切処に貫徹するように空智慧は一切処に貫徹しているということとを自覚したのである。すなわち一切諸法は無性なるものだということを体解し

たのである。

さらにまた、『十明論』の二三頁には、「当以止觀力功熟方乃証知。」とあり、『十明論』の二四頁には、「如来智慧以戒定慧衆善方便、而以照之、而緣縁之中、無作者無成壞故。」とある。この二つの引用文は本有・修生を論じている項の中の文であるが、要するに諸仏の解脱の智慧は本有でもなければ本無でもなく、本有修生でもなければ修生本有でもない、全くの無性なるものであると李通玄は主張しているのである。『搜玄記』卷三下に存する智儼の法界縁起説では、十二因縁は本有でもあり修生でもあり、本有修生でもあり、修生本有でもあるとしているのであるが、李通玄はこれらを一切否定して無性に徹底し、この無性に基づいた法界縁起説を構築しているのである。止觀の功が熟し、無性なることが体解され、戒定慧の三学の方方便力でもって無性なることが自覚されるのである。

あるいはまた、『十明論』の四六頁から四七頁にかけて、「此是初觀。第二次第、乃至第十倍倍增広、量度想念皆尽虚空。令其自心亦尽虚空。心同虚空、其心自定朗然安樂。方從定還起十方、觀四維上下、周遍推求自心、内外都無所得。方始了知空慧現前、名憶念一切諸仏智慧光明普見法門。」とある。これはいわゆる李通玄の仏光觀である。光明の遍満性を利用して自己の心を虚空と同等にする觀法であり、自己の心

を虚空と同等に出来た時、空智慧、すなわち真智慧の無性なることが体解されるのである。行位で言えば初住位で体験される心境である。仏光観で得られる三昧を無量方便三昧と言いい、空智慧、すなわち真智慧の無性なることの自覚を内容とし、普賢の万行への出発点ともされる。

結

空智慧、すなわち真智慧の無性なること、すなわち一切諸法の無性なることを了解することが、十二有支を大功德海なりと自覚するための根本の条件である。しかも戒定慧の三学の遵守、実行、さらにはとりわけ仏光観をはじめとする種種なる観法の実践に依る以外、一切衆生はその無性なることを体解することは出来ないのである。

李通玄にあつては真智慧から無明に至るまで、その根底を無性なることが貫ぬいており、一切諸法の無性なることの徹底した自覚、これが李通玄の実践思想の根本であると言える。しかもこの無性は因分に於ける三乗の空觀的無性性ではなく、因分果分を含み、一切諸法を一切諸法たらしめる性起^⑥、ないしは、法界縁起の根柢としての果徳の無性性である。喩えて言えば、一切皆無であるのに厳然と我々の目の前に存在している虚空のごとく、一切皆無でありながらも真智慧として厳然と存在している無性性である。また、言うまで

もなく前述したように、この無性性を体解するためには戒定慧の実践、とりわけ観法の実践を必須の条件とするのである。

1 本拙論に於いては筆者自身が校定した『十明論』（華嚴学研究所資料集第一輯、華嚴学研究所発行、山喜房仏書林発売、昭和六十三年四月）を使用する。以下『十明論』の頁数は、この校定本『十明論』の頁数である。

2 拙論「李通玄における光明思想の展開」（『華嚴学研究所』第二号所収）中の註の（一）参照のこと。

3 例えば『摩訶止観』卷五上には、「無明即法性」（大正四六、五五下）とあるが、「法」に執着しており、「無」に徹していない。また、何故に無明が法性なのかの理由も述べてはいない。したがって李通玄のような、無明そのものに対する存在論的かつ認識論的な探究の姿勢は全くない。

4 この言葉は李通玄の根本思想を示す言葉のひとつと言える。

5 李通玄自身は自らの観法を仏光観と呼んではいない。宝色光明観と呼んでいる。仏光観の原初形態をはじめ李通玄の光明思想については、拙論「李通玄における光明思想の展開」（『華嚴学研究所』第二号所収）を参照のこと。

6 性起の思想は理事無礙の思想に相当し、華嚴の思想の至境を語る言葉としては適切である。古来、天台学派によって悪用された面が強い。

△キーワード▽ 無明即無性、無明即根本智

（華嚴学研究所）